秋津国霊異記～８月は忘れたころにやってくる

さんすべりあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
秋津国霊異記～８月は忘れたころにやってくる

【Ｎコード】
Ｎ６１７２Ｚ

【作者名】
さんすべりあ

【あらすじ】
怖い、偉そう、近付けない。
それがいつも言われるベスト（意味的にはワースト）スリー。だが呉葉（♀）は気にせずわが道をゆく。主人公最強。ただし霊は見えません。いっそ消す。家や学校の守護結界まで消すので、毎日いろいろ苦労中。
最近の発見：その１．友人が殺人犯の容疑者になりました。その２．術者警官の統括者が精霊でした。

数日前・Until The End（前書き）

ギリギリすれすれボーダーな話かと。
笑いとシリアスの両立をめざしますが、きっと何度か「苦手な方は自主避難お願いします」といういつもの文が出てきます。

数日前・Until The End

「高司(たかつかさ)、ちょっと付きあえ」

夏休み中の登校日、終礼が終わるとすぐに榎(えのき)が声をかけて来た。

気温は三十度を超えるのに、黒木綿に五つも紋のついた紋付袴(もんつきはかま)姿である。

そこまで暑くなくても普段着るには非常識で、老人には傾(かぶ)き者、今時分ではバンカラと呼ばれるかっこうだ。

羽織のひもは太く長く、それを結んで首にかけている。普通でないその長さは、ケンカの際に袖(そで)をたすき掛けにするのに使うと知れる。

腰には二本差し。気にくわない教師の授業では刀を抜いたこともあるという。悲鳴をあげて教卓の陰に隠れた教師を鼻で笑い、悠然と刀で鉛筆をけずったのは、今でも校内の語り草だ。

「私に拒否権はあるのか」

いちおう訊ねてみたものの、身長１８５の榎に、何寝言いってんだという視線で見上げられた。

呉葉(くれは)はサンタウラリア人とのハーフである。

おかげで身長は誰より高い。

女なのだが、見下ろせば、大魔王もまっ青な威圧感がある。異世界召喚されたら、即ラスボス認定。

怖い、偉そう、近付けない。

それが呉葉がいつも言われるベスト（意味的にはワーストだ）スリーである。

別に他人からの評価はどうでもいいが、だから学校生活というものは苦手だ。周囲に無視する気がなくても結果的に誰も話しかけてこないから、急な変更などは伝わってこない。

プチっとイジメだ。

そして教師にさぼった理由を訊かれて正直に答えると、かなり深く納得される。

『そうだよなあ。お前に声をかけるのは度胸だめしと一緒だからなあ。

チキンレースの対象になれるって、前から思ってたんだ。

俺はむかし蝦夷（えぞ）島に行ったことがあるんだが、そこでは道路を渡る牛に向かって子供が自転車を猛スピードで走らせて、一番ギリギリまで行けた奴が勝ちって遊びをしていた。

うっかり牛を怒らせたりすると本気で病院行きで』

しみじみとそう言ったサンタウラリア王国の教師は、次の瞬間、呉葉の一睨みで身を縮めた。

目撃者は語る。

視線の擬音は、キラーンよりチュイーンの方が正しかったと。

銃を構えてないのに１３番目のゴ〇ゴな気配がしていたと。

そんな、まっとうに生きている人間は近寄りたくない二人がそろ

っていたので、教室の空気はクーラーいらずに涼しかった。

「拒否？　手前にそんな権限はねえ。とっとと来い」

見下ろされる威圧感に屈せず、榎がアゴをしゃくる。

学生なのに、そんな仕草が妙にはまる男だ。呉葉は少し感心した。

「どこへだ」

他の多くの学生とは違い、どうしてもこの無頼漢（ヤンキー）と出歩くのが嫌なのではない。

「墓参り」

「ああ、聞いたことがある。ここ秋津国では、ある時期になると人々はレミングのごとく一斉に故郷を目指し、現地で一晩中ボンダンスを踊り明かすという」

「いかにも異人的な……。あのな、それ間違っちゃいねえが、なんか違う」

無表情かつ得意げに知識を披露したら、榎が頭痛をこらえる表情になった。

「不親切ないい方だな。不備、あるいは誤りがあるならハッキリ正確に指摘しろ。

長距離運搬術者のかき入れ時で、空には人と術者と霊魂が乱れ飛ぶのだろう？

私には『見えない』が、霊が『見える』者には非常に幻想的かつスペクタクルな眺め。地にいる者は感極まり、たまや～と叫ぶ」

榎の眉間に、深々とシワが刻まれた。

後ろから爆笑があがる。

2　主要登場人物４／１０（前書き）

まったり進行。
明治？な雰囲気を楽しんでいただけたらいいなあ、と思います。

2　主要登場人物４／１０

「どんだけ適当！　高司、そのうち秋津国民から抹殺されるな。百圓賭ける！」

たて襟シャツに薄手の着物、麻色のはかま。
いわゆる書生ふう。
走って来た男子学生は、暑さに負けず、ムダにテンション高めだった。

君はギャルか。と呉葉は心の中だけでツッこむ。

「じゃあ僕は、男のみ返り討ち、女の子はハーレム要員に千圓」

一歩遅れてやってきた学生も、涼しげな表情だ。汗一つかいていない。
縁なし眼鏡のブリッジを中指で押し上げながら、人あたりの良さそうな笑顔でゆっくりと歩いて来る。

こっちには鞄を投げて撃沈してみた。
「痛いなあ。高司女史、僕そんなに丈夫じゃないんだけど。ところで、何でそんな誤解したの」
すぐに復活する彼には、きっとゾンビの遺伝子が組み込まれている（ウソ）。

二人とも、榎と呉葉を避けない数少ない生徒である。
きもの座り具合がレアだ。

「波多野、北村。お前らは呼んでねえ」

「ガイドブックに書いてあったんだ」

榎と呉葉の言葉が重なった。

波多野と呼ばれた学生は榎の発言をスパッと無視し、呉葉を見上げた。

「ついでに『街にはチョンマゲの侍がカッポし、忍者がそこかしこに潜んでお家番をしているので注意しよう』って書かれてんだろ。なんでそこで信じるかな。

士農工商の身分制は、ずっと前に廃止されたっつの。元は士族で華族の榎だって、普通に一緒にいるだろ」

「いるが帯刀しているし、忍者もどきもその辺に隠れている」

「どこにだよ！　この非常識男は論外！」

呉葉と波多野が言い合う横で、我関せずの北村が小銭を取り出した。

「お墓参りって結崎のだよね。僕たちも一応関係者だし、連れて行ってくれたまえよ。はい、花代」

「テメエらはテメエらで勝手に行け」

「場所、知らないんだ」

「「……」」

結崎と聞いて、呉葉は口をつぐんだ。

波多野は足元に視線を落とす。

微妙な沈黙のあと、不機嫌な榎を先頭に第一師範学校を出た。

全員で黙々と歩く。

道はレンガが敷き詰められており、左右には瀟洒（しょうしゃ）なゴシック調のビルが立ち並んでいる。この学校は、人々がめかしこんでそぞろ歩く高級商業地区に建てられているので、すれ違う人々も相応に華やかだ。

そんな洒落者（しゃれもの）の通行人が、不機嫌さと威圧感を感じて榎を避けるさまは、まるで川の中に突き出た大岩を水が避けるが如し。

婦人や令嬢を守るように下男が立ち位置を変え、高山帽をかぶった紳士が顔をしかめる。

「やがて世を担うべき官立の生徒が渡世人（とせいにん）まがいに歩くとは、まったく世も末だ」

「異人までいるし」

行き交う人々が多くて誰が言ったのか分からないのをいい事に、聞えよがしの不平をつぶやく者もいる。

渡世人とは前時代のヤクザみたいなもので、有名どころでは清水の次郎長などがいる。

義理と人情を合言葉に、斬ったハッタの大騒ぎをするのが大好きな人々だ。

その勇名は海外にも届き、ＤＥＩＲＩとしてマフィアが機関銃をぶっ放す際にも使われている。

波多野がムッとして声の主を探そうとして北村に止められているが、まあ、事実はそう遠くない。

「榎は実際ＤＥＩＲＩに参加した事があるらしい」

「テメエ何勝手にねつ造してやがる！」

「何と言われても耐え忍ぶと決めたのだ。
私も、異人と言われると心が痛む。しかし、いじめられて孤立してないからまだ平気だ。
声をかけてくれるから、波多野と北村には感謝している。もちろん榎にも」

非常に殊勝なセリフであった。
ココロやさしい者が聞けば、涙のひとつも落としただろう。
発言者が無表情、しかも全然そう思っていないのが明白でなければ。

「テメエふざけんな！」
「高司の冗談ってわかりにくいんだよ！」

即座に暴言が返ってきた。
呉葉は胸にあてていた手をおろし、斜め４５度に向けていた顔を戻した。

「固いと言われたから工夫してみたのだが。人づきあいは難しいな」
「高司女史、頼むから工夫の前に世間の常識を覚えてくれたまえ」

優等生然とした北村も、たまに毒舌である。

3　状況説明、時々ブンガク。

言い合いながら、坂道を歩く。

夏の残照に、生活臭が立体的に立ちのぼる。

脇道を一本入れば、瓦(かわら)ぶきに漆喰(しっくい)壁の家々が連なっていて、粋(いき)な芸者が風呂敷に包んだ三味線を持って歩いていたりもする。

数町先には、玄関近くに仕事道具を出している人々。上半身もろ肌脱ぎで、作業をする職人たちの家が立ち並ぶ。

呉葉が興味深く首をつっこんでは、友人たちに引っ張り戻される。

そこから先は今までに増して急な坂と、昼なお暗い鬱蒼(うっそう)と茂った森だった。

ここまで来ると、街から外れる。

狸も出れば追剥(おいはぎ)も出る。妖怪も出る。

「妖怪か。？製以外見たことが無いのだが、ナマのが見れるか？」

化け狐注意、の看板を呉葉はつついた。

「ふふふふふ」

「捕獲する気か！？」

波多野がどんびきした。

「いや。あまり興味はない。常識を知れと言われたから、見るべきかと思っただけで」

素に戻って答える。ちなみに呉葉の素とは、無表情と同意語だ。

「だったら今の笑いは何なんだよ！！」
「雰囲気だ。秋津らしくていいだろう」
「それ間違ってるから」

「うるせえ。あっちが高司を怖がらなければ、好き勝手に出てくるさ」

深いヤブを見やった榎は、鬱陶しげに追い払う手つきをしていた。
呉葉には『見えない』何かがいたのかもしれない。

「そういえばサンタウラリアって、霊はいないけど妖怪はいるんだってね。不思議だ」

北村が、懐（ふところ）からカメラを取り出してシャッターを切った。

この国の人々は着物の袖や懐をポケット代わりにするが、こんな大きくて重い物を入れているのは北村だけだ。
波多野と彼は、当世はやりの報道部なのである。
常に記事になる写真を探し、撮っている。

「霊、いないんじゃなくて、高司みたいに『見えない』だけじゃないのか？　不便ー。旅行する時とか郵便物とか、どうしてんだ」

「車で運ぶ」
「時間かかりそうー。不便ー」

そんな事はないと呉葉は思ったが、物理法則から何から別次元な気がする彼らに言っても理解してもらえなさそうだった。

ここオカルト大国『秋津』では、遠くに移動する時は韋駄天(いだてん)に力を借りる術者が人や荷物を運び、軽い手紙なら使役霊が届けている。

車より速いらしいが、理解しがたい事実だ。

ちなみに妖怪は生物である。

犬猫と同じで、捕まえようと思ったら捕まえられる（サンタウラリアには標本を展示している博物館さえある）。

生態が地上の大多数と異なるだけの、レッドデータブックに載せるべき希救種だ。

触れない上、測定のたびに不定値を返してくる神や霊とは根本から違う。

「妖怪も運輸業もどうでもいいが、テメエ、無闇にその辺歩くなよ。せっかく帰省している霊が消える」

呉葉が林の奥の寺門をくぐろうとしたら、榎に腕をつかまれた。

門前で花と線香を買っていた波多野が振り返る。

「二度も死んだら笑えねー。

なんのための盆だ。実は罠？　もう来るなって？

あ、思いついた。高司そういう商売しねえ？」

「商売？」

「全自動お祓い業」

ナゼか波多野は得意げだった。

「心ならずも自縛霊になってしまったそこのあなた、成仏したくはありませんか？

毎晩ワラ人形に五寸釘を打たれて苦しんでいるそっちのあなた、怨念を祓ってあげましょう、なんて」

普通ならインチキ商売な内容も、ここ秋津国ではリアルである。

「良い考えだけど、オレは征良（せいら）さんたちに邪魔されるに三千圓賭ける。

さて霊の方々、ちょっと物騒な人が通るから、近寄らないでくれたまえよ」

秋津人にも霊が『見えない』人間はいるが、波多野たち三人は『見える』方だ。好き勝手言いながらも呉葉を適切に誘導する。

夕方、いわゆる逢魔刻（おうまがどき）の墓地には似合わないバカ騒ぎだ。

もしいたとしても、狸も追剥（おいはぎ）もそろって敬遠するだろう。

4　霊が見える国でのお盆事情

一般の人々は午前中に墓参りを済ませているので、ふざけているのを咎める者もいない。

深(しん)とした中を、妙なテンションで墓石の間を抜けて行く。

黄や白の菊の花が物寂しい彩りだ。

ほのかに残る線香の匂いもどこか空虚で、だんだんと波多野の声がしぼんでゆく。

「ぜったい儲かるって」

無理にもりあげようとした彼の頭に、呉葉はぽんと手を置いた。

くしゃくしゃと撫でる。

「気づかってくれて、感謝する」

「高司っ、お前ソレ違えだろ！　ガキ扱いすんなー！」

「……波多野って不憫(ふびん)だよねえ……」

榎が、ひときわ大きな墓の前で足を止めた。

区画は広く、最上の黒御影石が段になっている。

横に建つ墓碑銘には結崎の他に何人もの先祖の戒名が彫ってあり、名家であると分かる。

ただ、随分と昔に献じられた花は枯れたまま取り替えられていない。

茶碗も乾いている。

どこよりも立派な石は薄汚れ、誰の訪れもないことを示していた。

「ひでえ……。親戚なんていっぱいいるんだろ。盆なんだから、一人くらいお参りに来いっつの」

「来ない。華族だからこそ、醜聞（しゅうぶん）には敏感だ。組員とつるんで薬物売買、あげくに死亡なんざ、忌避されて当然だ」

榎は手を振って呉葉を遠ざけると、誓詞を唱えて不動明王の印を切った。

紅蓮の炎が墓石を包み、枯れた花はおろか、すべての汚れを焼きつくす。

もっともそれは呉葉には『見えない』火だったので、手も道具も使わず、全自動で墓石がキレイになっていくのを不思議に思うだけだ。

「……前にも言ったかもしれねえが、結崎はきっちり成仏しやがったから、迎え火でも焚けばこっちに帰って来るだろうよ。何にも気にしねえようなカオして、生者に混じって盆踊りでも踊る奴だ。

けど、焚く奴がいねえ。

いくら仲間でも、俺が他人ん家の先祖霊を迎える火を焚くのも変だしな」

「だから墓の掃除って？

会いてーなら、変でも何でも焚けばいいのに。

オレだったらそうする。北村がこんなだったら、絶対オレが呼んでやる」

「気持だけもらっておくよ。
波多野ならそうして、後で困るんだろうねえ。
一般的に言って、供養は家単位だもん。結崎や僕一人なら話のしようもあるけど、見ず知らずのお爺さんお婆さんまで来るんだよ？
満足なもてなしもできず、悪霊化されるのが関の山」

「うおー悪霊反対」
線香の束に火をつけつつ、茶碗にお茶を淹れつつ、波多野と北村が応じる。

呉葉はただそれを見ていた。
うかつに墓の敷地に入って、何か起こるのが怖い。いや、怖いとは違うのかもしれないが、責任のとれない事態になるのが嫌だ。

呉葉は霊を消す。
霊力を消す。

霊が『見えない』『聞こえない』『使えない』、ついでに『影響を受けない』のは故国サンタウラリアにいた時と同じだが、逆に霊サイドでは実害を被っているらしい。

無差別殺霊犯と非難された。

それでとある神様を怒らせて、巻き込まれた結崎が死んだ。

神いる国で神罰とは、罪とは、命で贖(あがな)うものなのだ。

薬物の売人をしている学生なんてバカでも、呉葉と口論中でも、死ぬ必要はなかったのに。
少年院で反省とか更生とか、その程度でいいのに。

そう思うが、だから結崎が死んだのは呉葉のせいだ。
これ以上のうっかりは許されない。
――――と真面目に後悔しているのに、

「高司がサボってる～。
北村先生ッ、オレたちばっかり働かせて、一人高みの見物なこいつを何とかして下さいッ」

波多野が、大衆演劇なみの芝居をする。
北村もふざけた口調でうなずいた。

「うむ、願いを叶えてしんぜよう。代わりに夏休み課題の資料を見せるのじゃ」

「資料だけでいいのか。ふつう、本文の語尾を変えた丸写しじゃね？」

「写してバレたら、評価が下がるじゃない。
僕だって本当は自分でやりたいよ。その方が確実で正確だし。
けど、外に調査に行くと思っただけで、熱射病になりそうなんだもん。
ゆえに妥協案。同じ資料を使っても、確実に波多野と違う論文になるから、安心して見せたまえ」

「何だその上から目線なずるさ！」

涼しい顔で出したてのひらを叩かれた北村は、呉葉に苦笑を向けた。

「という事。断られたから、高司君はそこに居たまえ。
手伝おうなんて思わなくていいよ。僕たちが代わりに掃除したし、線香も供えたから」

遠回しに、入って来るなと牽制された。

波多野が「なんでそうなる。違うー、そんな事言ってねー」とじたばたしていたが、呉葉は正しく理解してうなずいた。

5　所変わって

榎が低くうなる。

「……こんな見栄だけの家に気を遣うアホなんざ、連れてくるんじゃなかった」

「たまに自分でもそう思うけど、墓の力場を壊しても意味がないよ。どうせやるなら、もっとネタになる事にしてくれたまえ」

「その程度なら、榎の気晴らしに付き合っても構わないが」

人間にも霊にも実害がないなら、いくら場を乱そうが遠慮する必要はない。

呉葉がこっそり片手を上げて提案すると、榎が凶悪に不機嫌になった。

「その程度、か。『こっち側』を知らないテメエが気楽に言うな。――――もういい。気が削がれた。手前はそこで突っ立ってろ」

彼らの理屈は、相変わらずよく分からない。

仕方がないので、呉葉は木陰に入って休む事にした。

瞬間、三人が救いがたい表情をしたので、もしかしたら大木の精でも消したのかもしれなかった。

そんなふうに遠くから墓前に手を合わせた後。

呉葉が友人たちと別れて道を戻っていると、学校の前できょろき

ょろと周囲を見回していた子供が駆けよって来た。
「失礼でございますが、高司呉葉さまでいらっしゃいますね」
有名呉服店の紋がはいったはっぴを着た、しっかしとした口調の子供だ。
尋常小学校は無料で全員に教育を与えているが、店や職人の中にはそれよりも稼業を覚えろと言う者も多い。この子共もそういう類らしい。
「お客様より、文をお預かりしております。たいそうお綺麗な方でございましたよ」
「ほう」
呉葉が答えるより早く、白い女の手が伸びた。
「あァら、呉葉ったらスミに置けないのねえ。付文だって」
「セイラ」
そばには誰もいなかったし、人の気配も一切しなかった。
が、いつの間にか女――――月森征良は、呉葉の隣りで楽しげに手紙を開いている。
子供が慌てて自分の手元を見、空になっているのを知って顔色を変えた。
「おやめ下さい、他には見せてはいけないと申しつかっております」
「だが、私は読めない」
「は？」
開き直って、いっそ偉そうに申請すると、子供の目が点になった。

「一文字一文字くぎって書いてくれるならともかく、そのタテ線にしか見えない記号は判別不能」

「そんな……、だって俊英がつどう第一師範学校の学生さんでございましょう」

「第一でも市販でも、それを根拠にタテ線が読めると思うな」

「……未就学の小僧でも読めますが……」

バカにされるのと同じくらいに驚かれ、呉葉はつい空を仰いだ。

「ふふふ。先月の期末考査、国語・古文・漢文は一つも分からなかった。

見て分かるだろうが、私は半分サンタウラリア人なんだ。

機械大国で生まれ育った者として、科学と理論をこよなく愛している。

数字の神秘に栄光あれ！

そしてあらゆる文学は、私の半径二メートル以内に入って来るな！」

心の底から叫んだら、通行人がささっと避けた。

呉葉は、がっくりと頭を落とした。

「……ああ、またやった。この頃ストレス溜まっていて。反省はしてるんだがな。

しかし、あの態度も酷い。なんだあいつら、歩く文学か？」

「お馬鹿さん。

授業で苦労してるんだろうけど、ホント困った脳ミソよねえ。かたより過ぎ。

まあつまり、小僧さんは知らないでしょうけど、呉葉にこんな草書が読めるわけないの。

アタシが読んであげなきゃ、どんな切実な恋文だってゴミよ、ゴミ。紙屑」

言い切られた。

5　所変わって（後書き）

すみません。諸事情により更新を停止します。
読んで下さった方、本当にすみません！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6172z/

秋津国霊異記～８月は忘れたころにやってくる

2011年12月25日17時54分発行